

特集

# 明治邂逅かいこう〜三重の近代建造物

1868年――。

260年余り続いた江戸時代が終わり、新たな時代が幕を開けました。その名は、「明治」です。

時の新政府は、さまざまな近代化政策を打ち出しました。教育・郵便・鉄道などの事業が進むに従って、西洋風の近代建造物が建てられるようになりました。

現在、三重県内を歩くと、美しい洋風建造物に出合うことがあります。(一部、愛知県犬山市へ移築) これらの中には、一見すると洋風ですが、伝統的な日本古来の技を使っているものも見られます。また、見えない部分にまで凝った

細工が施され、当時の職人たちのきざ気概が伝わってくるようです。

時は流れ、元号も明治から大正・昭和・平成へと変遷しましたが、近代建造物は、各時代の目撃者ともいえます。本年5月1日からは、新たな元号が始まります。この機会に、近代建造物に合いに行ってみてはいかがでしょうか。

\*各建造物の見学方法・料金および、関連するイベント・祭りなどの開催日時などはそれぞれ異なりますので、必ず事前にご確認ください。

\*三重県内には、ほかにも明治・大正時代に建てられた建造物が多く存在します。ここで紹介したのは、ほんの一例です。

取材・文……中村真由美  
撮影……梅川紀彦・尾之内孝昭

ただし※印の写真は取材先から提供していただきました



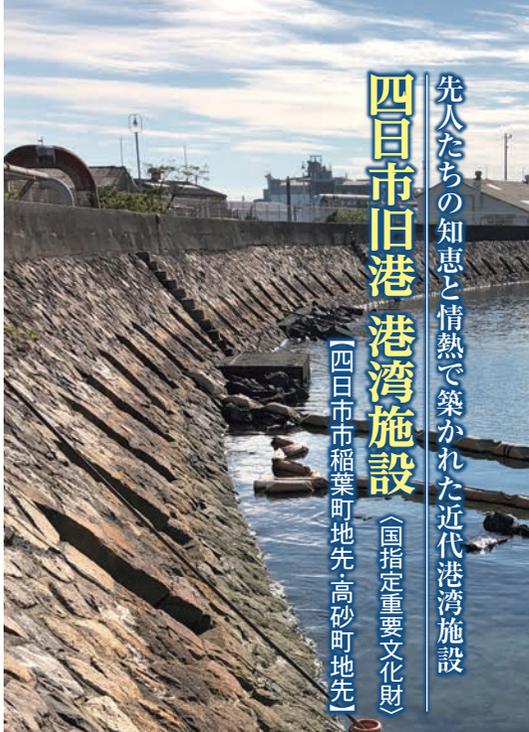
2 「旧三重県庁舎」外観(愛知県犬山市「博物館明治村」)

先人たちの知恵と情熱で築かれた近代港湾施設

## 四日市旧港 港湾施設

〔国指定重要文化財〕

〔四日市市稲葉町地先・高砂町地先〕



〔潮吹き防波堤〕

3年から12年もの歳月をかけて事業を成し遂げました。しかし、その後の暴風雨や台風によって防波堤が破損したため、同26(1893)年から翌年にかけて、三重県と当時の四日市町によって、改修工事が行われました。

をあげた服部 長七(1840～1919)が関わって行われました。世界的にも珍しい「潮吹き防波堤」の構造は、旧港内にある「稲葉翁記念公園」に設けられたレプリカで確認することができます。稲葉三右衛門の功績を称えた「稲葉三右衛門君彰功碑」や防波堤改築を記念して建てられた「波止改築記念碑」などを眺めていると、四日市港発展の礎を築いた先人たちの熱意が伝わってくるような気がしました。



〔潮吹き防波堤〕レプリカ

中部圏を代表する国際貿易港として発展し続け、近年は工場夜景のスポットとしても注目を集める四日市港には、周囲の景観とは趣が異なる一画があります。真つすぐ突き出た防波堤と、湾曲した防波堤が目を引く「四日市旧港」です。防波堤はいずれも石積みで、長年の風雪に耐えた風格が漂います。

これらの近代港湾施設の原型を整えたのは、地元の廻船問屋、稲葉三右衛門(1837～1914)でした。三右衛門は、私財を投じて、明治6(187

湾曲した方の防波堤は、この改修によつて、高さ3.7メートルの小堤と高さ4.7メートルの大堤が並行する二列構造になりました。その仕組みは、港外からの波を小堤で受け止め、小堤を乗り越えた波については、大堤に開けられた潮吹き穴から港内に吹き出すという独創的なものでした。そのため、「潮吹き防波堤」と呼ばれます。なお、改修工事には、土木技術者のオランダ人、ヨハネス・デ・レーケ(1842～1913)や、全国各地の大規模土木事業で功績



〔波止改築記念碑〕

お問い合わせ

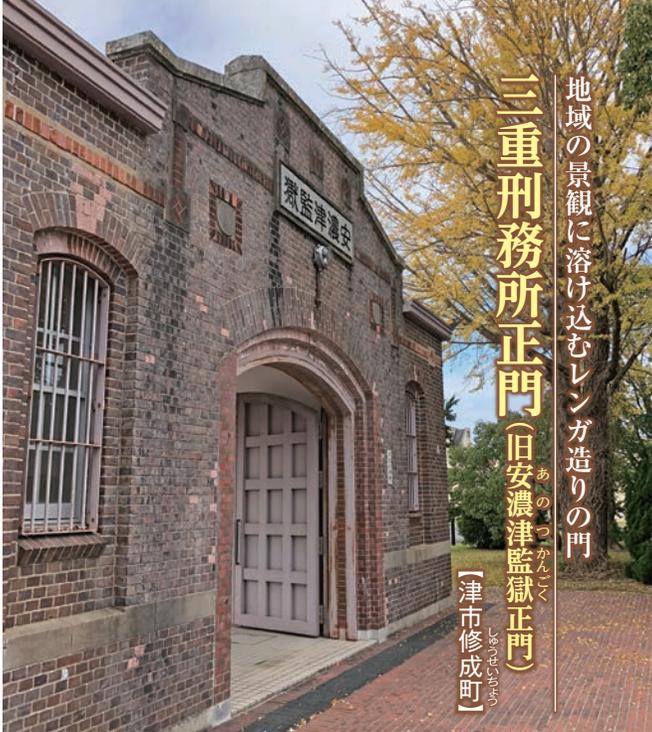
四日市港管理組合振興課  
TEL059-366-7022

地域の景観に溶け込むレンガ造りの門

## 三重刑務所正門(旧安濃津監獄正門)

〔あのつかんとく〕

〔津市修成町〕



〔旧安濃津監獄正門〕

高圧的なイメージよりも、温もりや親しみを感じます。「旧安濃津監獄正門」が建てられたのは、大正5(1916)年のこと。それ以前は、旧久居藩の米倉を改修した施設を使用していました。が、現在地に移築した際に、庁舎や倉房などと一緒にレンガで建てられました。

洋裁・金属などの作業を行っていただきます。入口脇に建つ「刑務所作業製品」販売所(土・日・祝日定休)を覗いてみると、パーベキューコンロやぬれ縁をはじめとして、伊勢型紙模様との和紙便箋や組みひものストラップ、伊勢木綿のハンカチーフ・ブックカバーなど、三重県の伝統工芸品も並びます。制作に熟練の技を要するものも多く、丁寧に一つひとつ手作りしている様子が見えます。



受刑者が制作した和紙便箋

津市の市街地を流れる岩田川に沿って歩くと、高い塀を巡らせた一面に気がきます。「三重刑務所」です。正面入口から入ると、イチヨウなどの大木が生い茂る中に、レンガ造りの建物が現れました。幅は約10メートル、奥行きは5メートル程度。中央の扉の上に「安濃津監獄」の文字が見えるものの、随所に施された飾り模様などを眺めていると、

大正11(1922)年に「三重刑務所」と改称した後、度重なる自然災害などによつて各建物が順次改築され、当時の面影を残すのは、この門のみとなりました。解体の話もありましたが、地域の人々の要望で、保存が決まったのです。現在、受刑者たちは一日も早い社会復帰をめざして、日々を過ごしていますが、その一環として木工・印刷・

お問い合わせ

三重刑務所  
TEL059-228-2161

文化施設が揃う上野城下の象徴的存在

# 三重県立上野高等学校・明治校舎

〔旧三重県第三尋常中学校校舎〕

〔県指定重要文化財〕

〔伊賀市上野丸之内〕



〔三重県立上野高等学校・明治校舎〕外観

三重県内に残る唯一の藩校建築「旧桑田堂（国指定史跡）や、現存する小学校校舎として県内最古の建築「旧小田小学校本館」（県指定重要文化財）などが揃う伊賀市市街地を散策していると、グラウンドの奥に建つ白い木造校舎が目にとまることが多いでしょう。飾りの付いた玄関ポーチや規則的に並ぶ窓などが、ひととき華やいで見えます。「三重県立上野高等学校」の明治校舎です。

同校の歴史は、明治32（1899）年に「三重県第三尋常中学校」として設置されたことに始まります。ただし、同年に尋常中学校が中学校と改称されたため、開校した際には「三重県第三中学校」と称しました。なお、当時の中学校は、現在の中学校と区別するために「旧制中学校」と呼ばれます。



開校当時の様子\*

でしたが、翌年の同33（1900）年に、現存する明治校舎を含む新校舎が完成。設計・創設工事全般を主に担当したのは、清水義八ぎはちでした。三重県内務部に所属していた義八は、現在、愛知県の「博物館明治村」に移築されている「旧三重県庁舎」をはじめとした公共施設を数多く担当したことで知られています。見比べると、玄関周囲のデザインや全体の雰囲気似ていることに気付くでしょう。

面白い、お邪魔してみました。すると、まず驚いたのは、天井の高さと各教室の重厚な扉です。天井に施された菱型模様の意匠などを見ると、校舎というよりリゾートホテルのような雰囲気、優雅な気分になります。また、扉の上部は開閉可能で、風通しもよさそうです。職員に話を聞くと、夏の涼しさは格別だと教えてくれました。

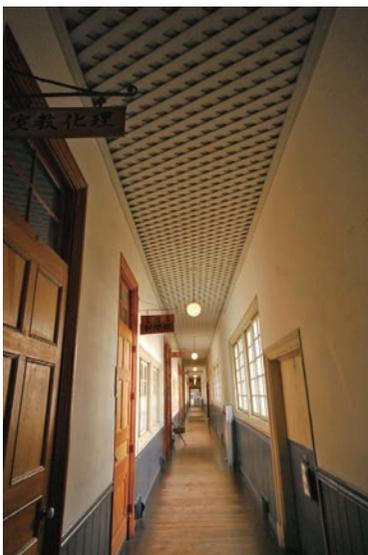
真つすぐ延びる廊下を歩いていると、「同窓会 文庫展示室 横光利一資料」の文字に気付きました。横光利一（1898～1947）とは、大正時代から昭和時代前半にかけて活躍した小説家です。真つすぐ延びる廊下を歩いていると、「同窓会 文庫展示室 横光利一資料」の文字に気付きました。横光利一（1898～1947）とは、大正時代から昭和時代前半にかけて活躍した小説家です。

## お問い合わせ

「三重県立上野高等学校」事務局  
TEL 0595-21-2550



華やかな装飾が施された玄関ポーチ



真つすぐ続く美しい廊下

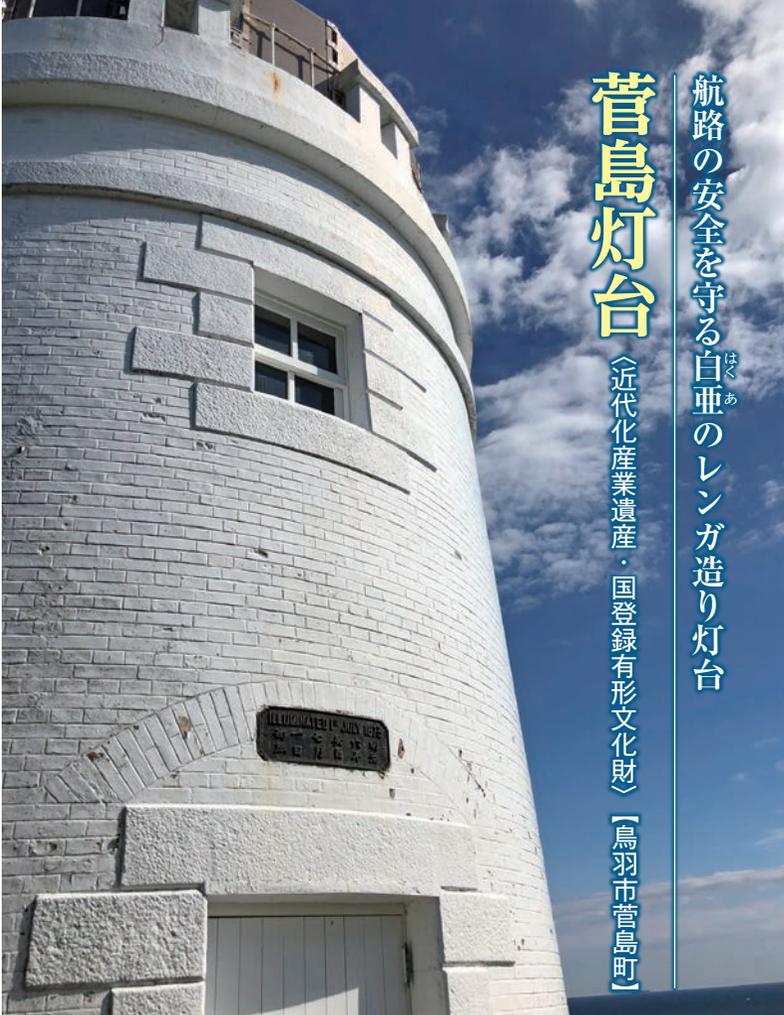


正門脇に建つ横光 利一の記念碑

\*印の写真は取材先から提供していただきました

# 菅島灯台

〔近代化産業遺産・国登録有形文化財〕〔鳥羽市菅島町〕



「菅島灯台」外観

「三重県への本格的な近代建築技術の導入は（中略）灯台の建設に始まる。日本近海の航路の安全性を確保するための灯台整備は、安政の開国以来、最も緊急を要した近代化諸政策の一つである。」

『三重県史別編「建築」』に記されたとおり、県内でいち早く誕生した近代建造物は、灯台でした。明治5（1872）年に現在の志摩市阿児町に「安乗埼灯台」、翌年には鳥羽市の菅島にレンガ造りの「菅島灯台」が点灯しました。『鳥羽

市史』によれば、竣工式には「当時参議であった西郷隆盛以下政府の高官も多数列席し挙行された」といわれます。なお、「安乗埼灯台」は当初は木造でしたが、昭和23（1948）年に鉄筋コンクリート造りに建て替えられています。小春日和のある日、「菅島灯台」を訪ねて、「鳥羽マリナーミナル」から鳥羽市営定期船に乗り、菅島へ向かいました。島に上陸した後は海岸に沿って東へと延びる遊歩道「しろんご海道」を歩きます。磯の香りと時々聞こえるさざなみを楽しみながら進むと、約30分であつた西郷隆盛以下政府の高官も多数列席し挙行された」といわれます。なお、「安乗埼灯台」は当初は木造でしたが、昭和23（1948）年に鉄筋コンクリート造りに建て替えられています。

リス人であることから、採用されたのでしよう。また、レンガは志摩市内の土を使用し、現地の瓦製造職人が造ったと伝わります。灯台を管理する鳥羽海上保安部では、当時のレンガ2枚を保存しており、交通課長の下畑伸介さんのご厚意で見せてもらおうと、漢字や数字に加えて記号のようなものが刻印されていました。おそらく、製造者を特定するための目印なのでしょう。職人たちが自分の仕事に責任と誇りを

持っており、責任と誇りを担うことが想像できます。灯台の基本構造は当時のままですが、当初の落花生油（ろうかせいゆ）を使用した二重芯ランプが、現在はLEDになるなど、光源などは時代に応じて進

化しています。また、灯台手前には同じくレンガ造りの附属官舎があり、係員が常駐して灯火管理を行っていましたが、昭和34（1959）年に自動化されたことで、無人となりました。この官舎（国指定重要文化財）は、現在は愛知県大山市の「博物館明治村」に移され、内部を見学することが可能です。一方、灯台内部は、普段は非公開ですが、「しろんご祭り」が行われる7月11日直近の土曜日に一般公開されます。

「しろんご祭り」とは、同島に伝わる海女の伝統神事で、白髭神社に奉納する「まねき鮑（あわび）」を求めて海女たちが競い合います。白い磯着（いそぎ）に身を包み、伝統を守り伝える海女たちと、146年もの長い間、行き交う船の安全を見守り続ける白い灯台。どちらも後世に残したい、貴重な遺産です。

## お問い合わせ

鳥羽海上保安部交通課  
TEL 0599-125-2303

持っており、責任と誇りを担うことが想像できます。灯台の基本構造は当時のままですが、当初の落花生油（ろうかせいゆ）を使用した二重芯ランプが、現在はLEDになるなど、光源などは時代に応じて進



鳥羽海上保安部が保存する「イギリス積」で積み上げられたレンガ



かつての「菅島灯台」と附属官舎の様子※



現在の「旧菅島燈台附属官舎」外観（「博物館明治村」）



「しろんご祭り」※

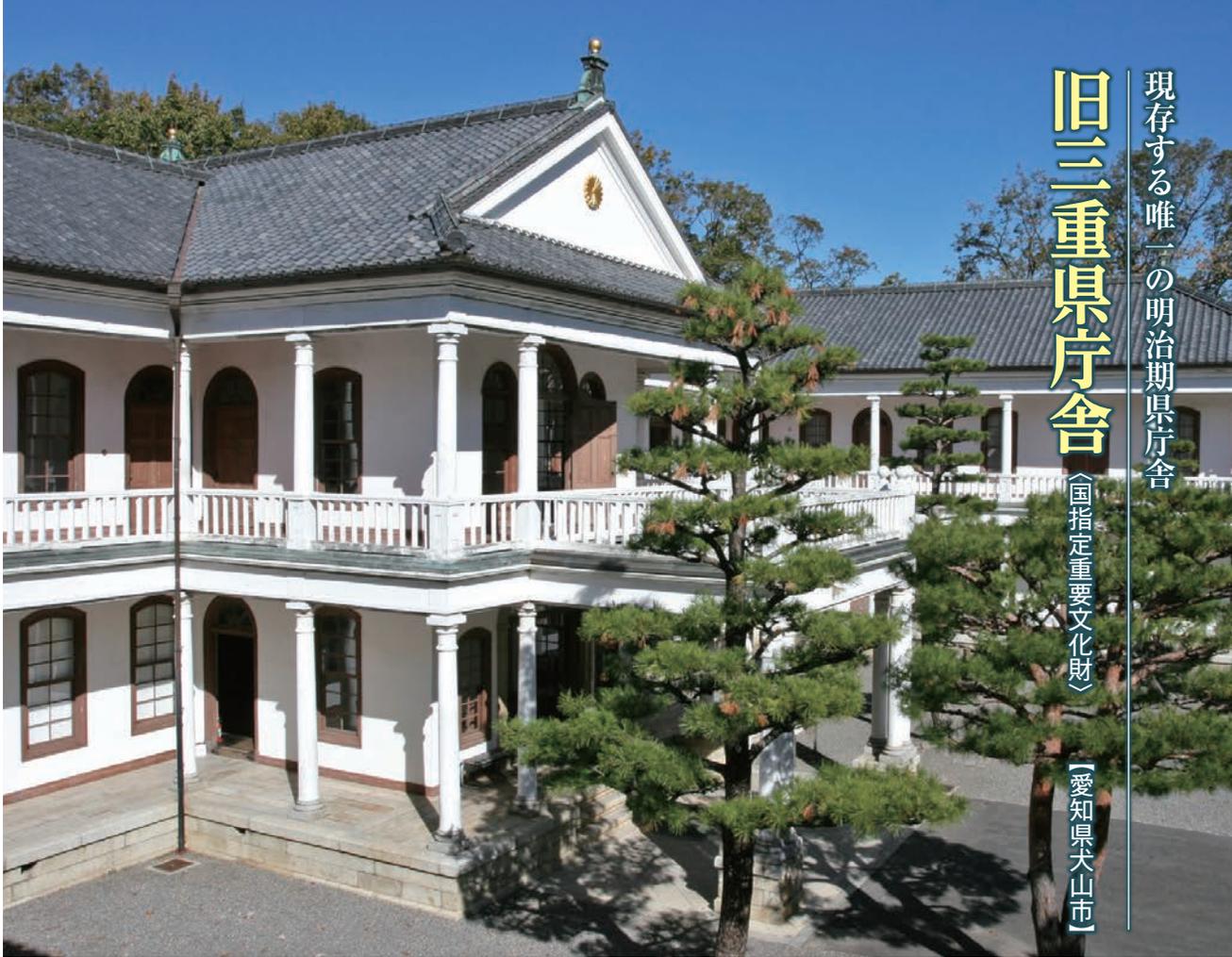
※印の写真は取材先から提供していただきました

現存する唯一の明治期県庁舎

# 旧三重県庁舎

〔国指定重要文化財〕

〔愛知県犬山市〕



「旧三重県庁舎」外観

カラな二階建洋風の堂々たる庁舎で、地方から弁当持参で参観する人が絶えなかったといえます。その後の近代建築の定着に大きく影響し、県民にも長く親しまれた庁舎でしたが、昭和41(1966)年に「博物館明治村」へ移築されました。

菊の花が咲き誇るころ、「旧三重県庁舎」に合うために「博物館明治村」を訪ねると、全国各地(一部は海外)から移築された明治時代(一部大正時代を含む)の建造物が出迎えてくれました。その数は60余りで、見ごたえがあるものばかり。一步、足を踏み入れただけで、明治の空気に包まれたような気分になります。

「旧三重県庁舎」は、正門から入ってすぐにあります。中央の玄関を挟んで廊下がE字型に広がる様子は、想像以上の規模ですが、全体的にはスッキリ

リした印象です。また、屋根の形などを見ていると、和風建築の要素も感じられます。こうした様式は、幕末から明治時代初期にかけて建てられた公共建築に多く見られ、「擬洋風建築」と呼ばれます。

内部では、明治20(1887)年に改築された知事室などが再現されているほか、明治時代の三重県の風景を撮影した写真や、「桑名萬古焼」や「伊勢根付」などの伝統産業製品が常設展示されています。また「明治時代の時計」を展示する部屋では、日時計が目に残りました。これは、かつて鳥羽市の菅島に



再現された知事室



日時計

## お問い合わせ

「博物館明治村」

TEL 0568-6710314

江戸時代の幕藩体制から、中央集権国家づくりへと大きく舵を切った明治政府は、明治2(1869)年に「版籍奉還」、同4(1871)年には「廃藩置県」を行いました。前者は、各藩が治める土地と人民を天皇に返還させる政策のこと。後者は、全国の藩を廃止して中央が管理する府と県に置き換えるというもので、政府が任命した府知事・県令が各府県に派遣されました。江戸時代の終り、三重県域には津藩など12の藩領と、天領(江戸幕府直轄の領地)・旗本領・伊勢神宮領がありました。その後、安濃津県と度会県となり、安濃津県の県庁所在地移転に伴う県名の変更などを経て、現在の三重県に統一されたのは、同9(1876)年のことでした。この時の三重県庁舎は、旧津藩の藩校「有造館」を使用していましたが、手狭なために新庁舎が計画されました。場所は、現在の「県庁前公園」二帯で、完成したのは、同12(1879)年でした。「津市史」によれば「当時としては、ハイ

あった「旧菅島燈台附属官舎」前に設置されていたもので、同官舎が「博物館明治村」に移築された際に一緒に移されました。なお、村内の同官舎前には、複製の日時計が設置されています。

明治時代の三重県の姿を多面的に知ることが出来る「旧三重県庁舎」は、じっくりと時間をかけて見学したい場所です。

「博物館明治村」で明治時代の三重県に出会う

## 宇治山田郵便局舎(旧伊勢郵便局舎)(国指定重要文化財)

## 旧三重県尋常師範学校・旧蔵持小学校(愛知県犬山市)



「宇治山田郵便局舎」外観



「公衆溜」上部

「博物館明治村」では、「旧三重県庁舎」や前述の「旧萱島燈台附属官舎」以外にも「宇治山田郵便局舎」「旧三重県尋常師範学校・旧蔵持小学校」と出合うことができます。

「宇治山田郵便局舎」は、伊勢神宮外

宮前の角地に明治42(1909)年に「山田郵便局(後に『伊勢郵便局』に改称)」の局舎として建てられました。その外観は独特で、入口を中心としてV字型になっているのがわかります。内部の構造はさらにユニークで、入口から入ってすぐの空間が「公衆溜」と呼ばれる円形ホールとなっていて、高窓から柔らかな日の光が降り注ぐ様子は、絵画のような美しさです。なお、本年1月から2022年10月予定までは改修工事のため、見学は不可となっています。

師の養成を目的として設置された尋常師範学校の本館でした。「津市史」は「当時としては、県庁舎とともに、県下の偉観であった」と評しています。

その後、昭和3(1928)年に現在の名張市に移築。「蔵持小学校」として、子どもたちの成長を見守り続けましたが、同48(1973)年に「博物館明治村」に中央玄関部分と右側の2教室部分が移されました。

春の兆しに誘われて「博物館明治村」を訪ねれば、かつて三重県内に存在した建造物たちが、思い出話を語ってくれるかもしれません。



「旧三重県尋常師範学校・旧蔵持小学校」外観

### お問い合わせ

「博物館明治村」

TEL 0568-67-0314

## 土井本家住宅

尾鷲の街並みに花を添える瀟洒な洋館



「尾鷲市朝日町」

土井本家住宅外観



ヤシの大木などが並び立つ庭

最も早期に属し、「上層住宅建築の代表的な例」と記します。

現在、内部は非公開ですが、敷地内の蔵の一部を「土井子供くらし館」として公開(予約制)しており、その際に外

JR「尾鷲」駅から東へ15分程度歩くと、ひととき背の高いヤシの木が目を見張る一画が現れます。ここは、土井本家です。土井家と尾鷲市の関わりは、寛永年間(1624~1644)の末頃(かえり)に始まるといわれます。代々山林経営を家業とし、宝暦4(1754)年には大庄屋(おおしや)となりました。『尾鷲市史』は、「経済的にも社会的にも尾鷲地域における

の奥に、2階建ての白い洋館が姿を現しました。玄関ポーチに施された飾り模様は優美そのもので、思わずため息が出ます。2階部分のバルコニーからは、今にも中世ヨーロッパの貴婦人が姿を現しそうです。この洋館が完成したのは、明治21(1888)年ごろのこと。『三重県史 別編 建築』は、「和洋館を併設した住宅としては三重県内で

第一人者となった」と紹介しています。

同敷地内へ入ると、美しく手入れされた庭



「土井子供くらし館」外観

貴重な玩具の数々や白い洋館を間近にすれば、心ときめくことでしょう。

### お問い合わせ

(有)土井林業

TEL 0597-22-0006